



ツーリズムの対象としたルーマニア

喜多, 朝子

(Citation)

兵庫地理, 44:57-65

(Issue Date)

1999-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002423>



ツーリズムの対象としたルーマニア

喜 多 朝 子

1. はじめに

日本において「観光基本法」が公布施行されたのは1963年であり、国連は1967年国際観光年に「観光は平和へのパスポート」のスローガンを掲げた。この頃から観光学を専攻する大学・高校が出現し、専門学校では観光事業に対応する実学を重視した科目を集めたコースが増加した。

わが国における観光地理学の原点は志賀重昂の「日本風景論」から始まるといわれる。現在は自然・文化景観論、各地の観光資源や伝統工芸・地場産業の活性化、サービス・交通業としての旅行業、マーケティング、観光政策などツーリズムに関わる研究は、21世紀の宇宙観光をも視野に入れると多岐にわたり、観光学の方法論と理論化、その応用論はこれからの研究分野であるといえよう。

筆者は、1998年夏ルーマニアで開かれた都市地理学のシンポジウムと巡検に参加し、短期間の聞き取り調査と若干の資料により日本からみた「ツーリズムの対象としたルーマニア」について報告する。

2. ルーマニアの地域概観

1) 自然

ルーマニアはヨーロッパ大陸の東南部をしめ、黒海に注ぐドナウ川河口のデルタと短い海浜地帯を除くと、アルプスに連なる内陸国である。したがって国土の中央部をしめるのは、南カルパート（トランシルバニア）山脈とウクライナから延びる東カルパート山脈で、高くて2000m程の峰々とその東・南側に緩斜面が広がっている。一方、2つの山脈に取り囲まれた500m前後の台地（現地ではテーブルランドという）がトランシルバニア

地方の核心部である。

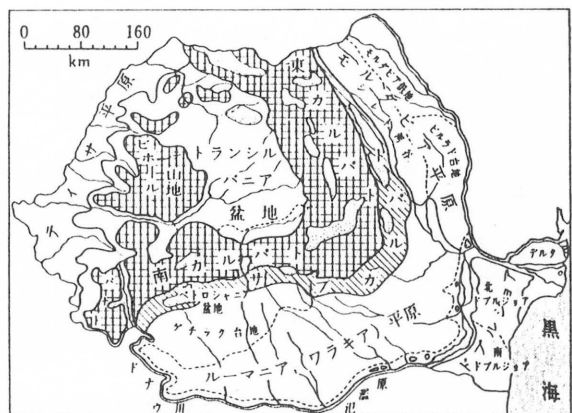
ドナウ川の本流はブルガリアとの国境をなし、流域にはワラキア（ルーマニア）平原が広がるが、東カルパート山麓東部のモルダヴィア平原、黒海沿岸のダブルジャ低地、プスタの東縁部にあたるティサ平原、トランシルバニア台地は肥沃なレスや黒土におおわれ、小麦・とうもろこしを主とする穀倉地帯をなしている（第1図）。

気候は温暖湿潤気候であるが、降水量は山地を除いて1000mm以下で、殊に東部のダブルジャ地方では500mm未満の乾燥気候が卓越している（第1表）。

2) 歴史と民族の多様性

ルーマニアの文化景観に特色を与えているのは、その歴史と民族の多様性による。

ルーマニア人は、ダキア人（インド＝ヨーロッパ語族）が定住しローマ人と混血、もしくはローマ化した民族だと言われているが、古代から中世には黒海沿岸におけるギリシャの植民都市の建設、ローマの属州化のあとゲ



第1図 ルーマニアの地形(K.J.G.Pounds)
(世界地理8：ヨーロッパⅢより)

第1表 ブカレスト(Bucuresti)の月平均気温・月降水量・月平均湿度

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温℃	-1.6	0.1	4.7	11.6	16.9	20.6	22.4	21.9	17.5	11.6	5.8	0.9	10.9
降水量 mm	43.8	39.0	35.4	47.9	78.4	85.3	64.6	55.2	47.2	45.1	49.4	42.1	633.1
平均湿度%	86	82	72	63	62	61	58	57	61	73	84	87	70

(1995年理科年表より)

ルマン系民族の移動、さらに東方からはアジア系遊牧民の侵入のもとにさらされ、中世以降は主にトルコとハンガリーの狭間にあって苦難の道を歩んだ。1859年初めてルーマニア国家が成立し、77年ヨーロッパ列国に独立が認められた。

20世紀前半には、第1次・第2次世界大戦を通じて政治・経済的な条約・協定にもなって参戦国は一貫せず、その結果領土の拡大・割譲・縮小などを経て今日に至っている。戦後は社会主義国家からチャウシェスクの独裁体制が続いたが、1989年遂に独裁政権は崩壊した。現在は共和制、95年6月EUへの加盟を申請している。

したがってルーマニアは、ヨーロッパ・アジア列強国の盛衰と相俟って周辺諸国からの移民・入植者が多く、少数民族の多い国である。しかし第2次世界大戦前、全国民の20%を占めていた少数民族も、大戦中のユダヤ人への迫害、戦後のドイツ人の追放などによってその比率は減少している。'96年現在の全人口は2,289万人で、ルーマニア人は約90%、マジャール（ハンガリー）人8%弱、その他ドイツ（ザクセン）人・ウクライナ人・ユダヤ人・トルコ人・ジプシーなどが、それぞれ歴史を語る地域に居住して独自の文化・生活様式を維持してきた。特にトランシルバニア地方はハンガリー・ドイツ系住民の多い地方である。

3. ルーマニアの文化景観

1) ツーリズムの対象としての景観

今日、人の手の加わらない地域を見出す事はますます困難になっている。地上の未知

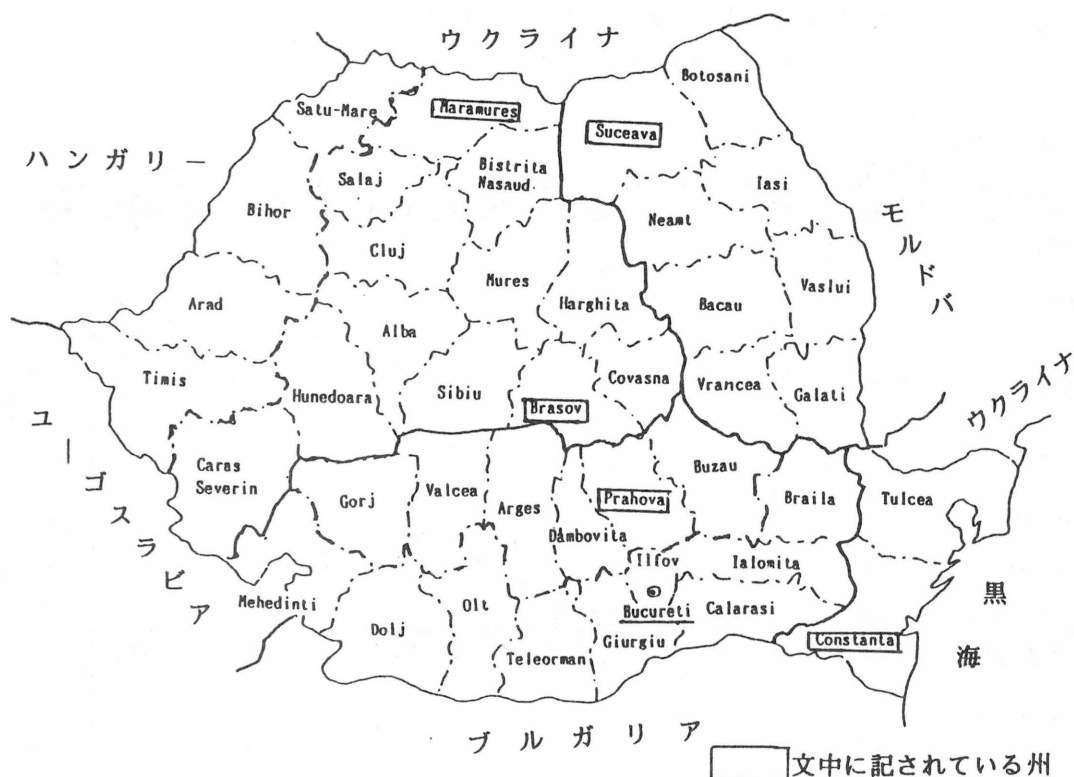
・未開の地が人間によって認識され、有効に利用する事が文明の発達を促し、土地に歴史を刻んできたのである。旅先で見る景観は、その土地で生きてきた人々の歴史的文化景観であり、土台となる自然環境とその地に関わって生きてきた人々の残したものの、すなわち、生産様式・生活習慣・伝統・言語や宗教など多岐にわたっている。

ルーマニアでは民族性に基づく各地の文化景観について考察した。

2) ツーリズムマップの地域区分

ルーマニアは、大別すると中央部の山地帯とそこから周辺に流下するドナウ川流域の平原からなる。東カルパート・トランシルバニア山脈は、1000～2000mの山地で峠も多く、交通の妨げにはならなかったため、移住者や入植者は各時代を通じて盛んであった。殊に11世紀以降、ハンガリーの統治下に入ってからマジャール人の入植者が増え、さらにハンガリー王やフランク国王の思惑もあってドイツ（ザクセン）人の移住者が、トランシルバニアに増加した。一方、東部ではスラブ人の南下やトルコの脅威に曝された。これらの歴史的状況が地域に与えた影響は大きく、文化景観の一大要素となる宗教や農村において顕著である。またルーマニア独立以前に成立したワラキア・モルダヴィア2公国の歴史も文化圏形成に寄与している。

これらの歴史的要因と民族・文化景観、自然環境、交通機関などに行政区をも加味して、ツーリズムの対象として4文化圏を設定した（第2図）。



第2図 ルーマニアの州別・文化圏区分図

4. 各地の特性

各地の特性をみる指標として、各地に残存・立地する文化財の中で、城塞・遺跡、領主の居城としての城・宮殿、教会・修道院、モスク、博物館、リゾート地として温泉（鉱泉を含む）を取り上げ、一方ホテルの立地数に

よって観光・保養地のおよその規模とみて地域を概観した（第2表）。

その中で特にホテル総数が突出しているのは、首都ブカレストの他、トランシルバニア山麓のブラホバ・ブラショフ両州と黒海沿岸のコンスタンツァ州である。

第2表 州別ホテル・文化財（城塞・宮殿・教会・修道院・博物館）・温泉の分布

★一……ホテル ホテル数…★一の総数（首都Bucurestiは3つ星以下は多く、統計上不明）

1. ワラキア地方

(1) ワラキア平原南部のドナウ川流域

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	—	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Bucuresti	7	—	—	—	—	—		8	12	4		19	
Braila		1	4	2	4	17			2			3	2
Calarasi			1			2			2			1	
Dolj	1	3	4	4	2	27	3		5	4		10	
Giurgiu			2	1		5	3	3	3	2		1	
Ialomita					2	2	2		2	1		1	1
Ilfov					2	2		1		3		1	
Mehedinti		1	2		3	10	4		2	1		1	
Olt			7	3	2	19	4			6		1	
Teleorman			3		1	7	3		2	1		1	
計						(91)	19	11	30	22		39	3

(2) ワラキア平原北部～トランシルバニア山地南麓

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	—	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Arges		4	7	7	3	36	5		6	8		10	2
Dimbovita			4	6	3	17	1	1	6	2		9	1
Gorj			9	1	17	36	2		2	5			
Prahova	7	7	22	13	33	139		5	4	5		18	6
Valcea		9	33	8	7	108	4		10	7		5	4
計						336	12	6	28	27		42	13

2. ドブルジャ地方

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	—	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Constanta	1	18	155	122	5	495	13		3	2	2	13	
Tulcea		1	3		5	14	8		2	2	1	5	
計						509	21		5	4	3	18	

3. モルダビア地方

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	—	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Bacau			8	5	1	22	4		5	5		7	1
Botosani			2	1	1	6			6	4		1	
Galati		2	3	1	1	14	3		6			4	
Iasi		2	4	1	2	17	4	4	8	7		18	
Neamt			3	2	9	17	4	1	4	9		11	2
Suceava		2	11	8	7	43	2		8	13		12	3
Vaslui		2	3		2	14	4		5	1		3	
Vrancea			2		1	5	1		3	4		1	
計						138	22	5	45	43		57	6

4. トランシルバニア地方とティサ平原

(1) トランシルバニア地方

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	-	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Alba		4	6	4	8	36	9	6	11	2		4	1
Bistrita-Nasaud		4	3	3	1	22	2		5	1		3	4
Brasov	3	8	26	47	17	152	15	4	8	1		2	4
Buzau			3	2	1	9	1		5	2		1	3
Caras-Severin		3	10	5	2	36			3			6	4
Cluj	2	3	13	7	5	55	7	2	8	1		8	4
Covasna		2	8	5	1	28	5	2	7			2	8
Harghita		1	14	3	3	37	6	2	10			1	7
Hunedoara	2	1	9	8	8	45	6	3	7	1		9	1
Maramures	1	2	8	7	2	35	5		2	2		5	2
Mures		2	12	5	4	39	4	4	7			4	2
Salaj			4	2	1	11	7	3	8			2	
Sibiu	1	3	5		1	24	12	4	12	1		16	
計						529	79	30	93	11		63	40

(2) ティサ平原

ホテル・文化財・温泉	★★★★	★★★	★★	★	-	ホテル数	城塞・遺跡	城・宮殿	教会	修道院	モスク	博物館	温泉
Arad		4	1	8	5	27	6	8	4	3		3	2
Bihor		3	10	8		37	4		6			4	4
Satu-Mare			5	2	2	14		3	6			10	
Timis	3	8	10	8	4	68	7	4	6	2		6	
計						146	17	15	22	5		23	6

1) ワラキア文化圏—首都ブカレスト

首都ブカレストは、東南部のドナウ低地に位置し、黒海沿岸の港湾都市コンスタンツァまでは約 200km、西北のハンガリー国境まではおよそ 450km、空路・鉄道・ハイウェイが放射状に国内外に延びている。人口は 233.9 万人('94)、工業生産力・諸機能も集中し、地方との格差は大きい。

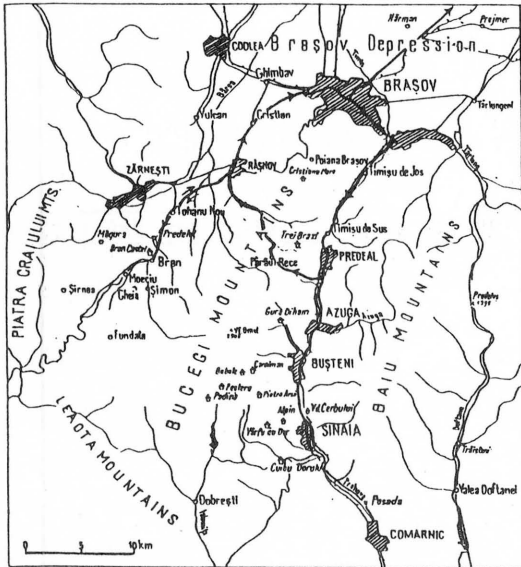
中世以降、ワラキア公国の首都となったが、一貫して国政の中心地ではなかった為、歴史的景観は旧市街地にわずかに観られるのみである。むしろ社会主義国、チャウシェスク独裁政権時代の都市計画による建築が目立ち、今なお都市の整備は充分ではない。

その象徴的な地区が The Parliamet Palace

(People's House)を中心とするブカレストの新しいセンターで、世界第2の巨大なビルといわれる建物は1989年チャウシェスク政権崩壊時、ほぼ70%完成していたが、その後は放置されていたものが、最近ようやく一部が公的な行事に使用され、一般人の見学にも開放されている。しかし周辺の未完成の高層ビルや中央分離帯に噴水を設置した街路・公園は荒廃したままであった。しかし各美術館・資料館が充実している。

2) プラホバ溪谷の中心地—シナイア

ブカレストからトランシルバニア地方へ抜けるプラホバ溪谷には幾つかの観光・保養地が立地し、黒海沿岸のビーチリゾート地に対



第3図 プラホバ渓谷
ーシナイアからブラショフへー

して山岳・山麓・渓谷に発達した保養・観光・リクリエーションのメッカである(第3図)。

中でもシナイアは、ブカレストから北北西州都プロエシュチを経て 120 kmの地にある。

プラホバ渓谷は、南カルパート山脈の東部を切って南流する谷で右岸一帯をブセジ山塊という。ピークは 2507m(Omu Peak)で、おおむね 2000m 前後の石灰岩の卓越した山地である。従って随所にカルスト・氷食・差別侵食の作用した奇岩(ニックネームはスフィンクス、ピラミッド、マッシュルームなど)や起伏が見られ、クライマーやトレッキングを楽しむ人々を引き付けている。気候は高地

(500～800m)にあるため、夏は涼しく、冬季の寒さもそれほど厳しくはない。殊に湿度は80%に達することもあり、温泉・ミネラルウォーターとともにヘルス＝リゾート地としても知られている。

シナイアの発展は、ブカレストから近いこと、自然環境の良さに加えて、17世紀末シナイア修道院が建てられたのを契機に、周りに集落の立地をみたのが始まりである。19世紀後半には道路・鉄道が整備され、1879年には町になっている。また同時期にロイヤル・フ

アミリーの夏の別荘としてペレシュ城(現在 The Peles Museum)、ペリショール城、フリショール城が当時の建築技術と様式(ドイツルネサンス様式にイタリアルネサンス、ドイツバロック、フレンチバロック、スペイン＝ムーア様式)を駆使して築城された。さらに15～19世紀の多種多様な美術・工芸品が収集され、ペレシュ美術館の基礎となった(写真1)。20世紀初頭には、モンテカルロのカジノをモデルにカジノ(現在、ホールではコンサート、各種の展示、国際会議なども行なわれている)とパレスホテルが町の公園の一隅に建設され、ツーリズムの幕開けとなった。その頃から住民・観光客人口が増加しはじめ、'96年現在の人口 15,292 人のうち約 50%が第3次産業に従事している。

観光客は、冬季・夏季ともにおよそ 1 万人から 1 万 1 千人を数え、冬季(10～2月)はスキー客が中心で平均滞在日数は 3.5 日、夏季(6～8月)は避暑・リクリエーションを主とした客で、滞在日数は 2.95 日である。また海外からの観光客も多く、冬季には周辺のハンガリー・旧ユーゴスラビア・ロシアの人々が、夏季にはイスラエル(60%)、イタリア・スペイン・オランダ人なども目立つ。

一方、ホテルは 4～2 星ホテルが合計 12 で 2470 ベッド、4～1 星のヴィラ 82 で 1600 ベッドが用意されていて観光客の多様なニーズに答えている。すなわち



写真1 ペレシュ城(シナイア)

- ① 町の中心地は、主要な道路沿いにホテル、銀行、郵便・電話局、小さな閑散としたテパート、レストランなどがルーズな街村をなし、滞在客がのんびり往来している。裏道の地元の人が集まる広場では衣料・雑貨・野菜・果物・パン・チーズなどの露天市が毎日立っていて、観光客も買物に立ち寄る。
- ② 美術・工芸・建築などの凝縮した博物館ともいべきシナイア修道院、ペレシュ博物館、城は、いずれもブセジ山麓にあって、中心地から歩いて15分位のところにある。
- ③ ブセジ山塊へは、途中乗り継ぎ2基のロープウェーで2000m前後の山頂に達する。冬季はゲレンデになる山腹は、一面ブッシュと草で覆われ、トレッキングや散策に最適である。
- ④ ブセジ山塊の西側の谷、ワラキアとトランシルバニアの境近くには、14世紀後半に建てられたブラウン城（日本ではドラキュラ城として知られる）が位置し、隣接して18～19世紀の野外村落博物館、フォーククラフトを主とする土産物店、カフェなどがあり、ツーリズムのポイントとなっている。

以上のことからシナイアは、その位置において、また四季を通じての保養・リクリエーション・観光の中心地として、年間を通じて多くの人々を集めている。

3) トランシルバニア文化圏

東・南カルパート山脈に囲まれたルーマニア中央部から北西部を占めるトランシルバニア地方には、古来、峠を越え川を経由してさまざまな民族や文化が往来した。殊に11世紀以降、ハンガリー帝国の支配力が高まるにつれ、ハンガリー人のみならずザクセンから遠くフランドル地方に至る各地からの移民・入植者が木材・鉱産物の開発や農民として定住

し、独自の多彩な文化景観を形成する要因となった。最も象徴的なのは、牛馬に引かせた犁農耕による穀物生産とぶどう栽培、豊富な木材による農家建築、さらにローマ教会ついでプロテスタントも浸透した。今も未舗装の街道をゆく馬車、家との間を隔てる簡素な木柵、ゴシックの教会は、ハンガリーと見紛う風景である。異なるのは彫刻を施した門や装飾豊かな木造の農家が街村や小塊村をなす。しかも小集落ごとに少しずつ違った門構えであり、特色を持っている。ドイツ系住民の家屋でも軒先の妻に紋章を掲げている。また定



写真2 農家の門構え（シビウ近郊）

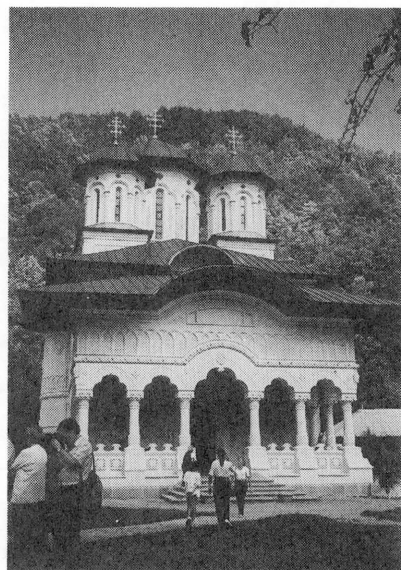


写真3 ルーマニア正教の修道院
（トランシルバニア）

住政策の結果、ジプシーの占住地区もあり、ここでは金属板を張ったまばゆい屋根をもつ木造彫刻の二階、三階建の家屋が集まった集落も見られた（写真2・3）。

また色彩感覚も独特のものがあり、都市においても古くからの様式を残した住宅建築に原色の組合せ模様の織物でディスプレイした室内は、ハンガリーからトランシルバニアへ続く一つの文化圏を示している。

中でも北部のマラムレシュ地方は、牧草地やトウモロコシ畑を背景に、草葺屋根に木彫の農家が、単調な農村景観を豊かなものになっている。

4) ドブルジャ文化圏

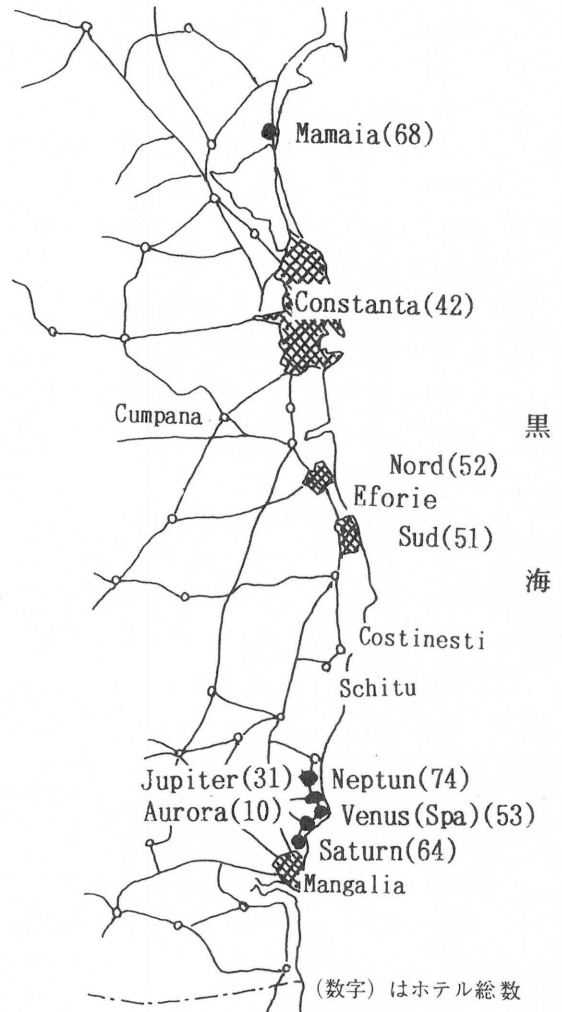
臨海部の乏しいルーマニアにとって、黒海沿岸地帯は唯一のシーサイドリゾート地域である。

港湾都市コンスタンツァは、古代ギリシャの植民都市として要塞が築かれ、次いでローマ帝国の支配下に入り、地中海沿岸との交易の根拠地として長く繁栄した。コンスタンツァの名もコンスタンティヌス大帝による。近世にはトルコの領有する所となり、トルコ系住民やユダヤ人の活躍もみられる。市内には古代ギリシャ・ローマ時代の遺跡が多く、遺跡・遺物を中心とした博物館の他、各種の博物館や美術館、教会・モスクなど東西文明の宝庫である。

この他、黒海沿岸には観光政策の推進によって、ホテル建設を中心とする大規模な観光開発が行なわれ、エホリエ・ママイア・ネプチューンなど、保養地として海外にも知られるようになった。しかもリビエラ海岸やダルマチア海岸に比べて開発は遅れたものの、物価は安く、広大なドナウ湿原と組合せたツーリズムは他に例を見ない（第4図）。

5) モルダビア文化圏

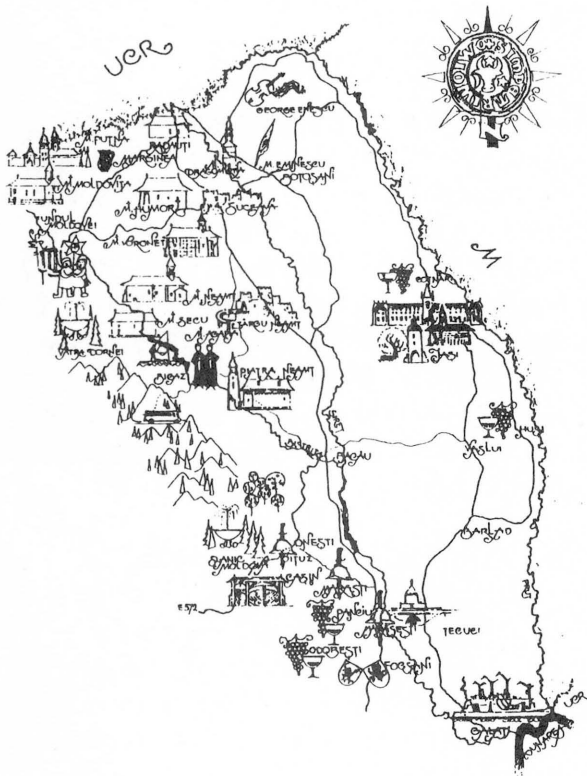
北東部をしめるモルダビア地方は中世後



第4図 黒海沿岸のリゾート・保養地

半にモルダビア公国を形成し、スチャバに都が置かれた。町の東部には14世紀建造の堅固な城塞が残存している。殊にトルコ軍の侵入を撃破し、抵抗したシュテファン大王をはじめ歴代の王は、輝かしいモルダビア文化を創造し擁護したことは、各地に残るルーマニア正教の修道院に見ることができる。正十字のプランと八角屋根をもつ聖堂の修道院の内外の壁は、キリストや聖人、モラビアの歴史を物語るフレスコ画で埋められ、ビザンツ帝国の影響を色濃く残していて、この地方にルーマニアの歴史を読み取る事ができる（第5図）。

MOLDOVA



第5図 モルダビアの観光地図

5. おわりに

ルーマニアは、アジアとビザンツの影響が強く、ヨーロッパ・アジアの列強国・歴史の狭間にあって、国家の興亡を繰り返して現在

に至ったことを、目のあたりにした。日本からは直航便がなく、乗換えなくてはならないが、関西空港を昼前の欧州便に乗れば、当日の深夜にブカレスト（オトペニ空港）に到着する。人々は素朴で人情厚く、何よりも子供達の眼が輝いて、生き生きしていた事が羨ましく思えた。

参考文献

- Ákos Birtalan(1997) : *THE TRAVEL GUIDE OF ROMANIA 1997 - 1998.*, Publirom
- Internatio Geographical Union Commission Conference(1998) : *A GUIDE TO FIELD TRIPS.*, Institute of Geography, Bucharest
- ジョーダン,T.G.・山本正三他訳(1989)『ヨーロッパ文化』., 大明堂
- カステラン,J.・萩原直訳(1993) : 『ルーマニア史』., 白水社
- 木内信蔵編(1979) : 『世界地理 8 ヨーロッパⅢ ルーマニア』., 朝倉書店
- Mountain Tourism Association of Prahova(1997) : *'97 PRAHOVA*
- 太田邦夫(1988) : 『東ヨーロッパの木造建築』., 相模書房
- 水津一郎(1969) : 『石の文化・木の文化』., 古今書院

(きた あさこ・神戸山手女子短期大学)